14　中日両国に於ける古代の疫病流行について

邵　沛

疫病とは、伝染と流行の特徴を持ち、古代には人類の健康と生命への脅威が甚だ大きい疾病である。本報告は歴史的文献を調査することによって、中日両国の疫病の発生と流行の幾つかの問題を検討した。

痘瘡：両国ともに、伝染病の中でも、痘瘡が人類にもっとも災難をもたらしたと見受けられる。中国でも最も古い記載は、晋朝の葛洪（二六五～三一三年）の『肘後方』に見られる。かつて東漢の建武中年間に、武林蛮を討伐した馬援は痘瘡で死亡したと伝えられている。日本における最初の流行は天平七年（七三五年）ということになっている、中国より四一八年後の記載となっている。

麻疹：麻疹が最初に流行した時期について、日本の流行は異説がいくつかある。『日本書記』には「欽明天皇一三年（五五二年）の稲目瘡を始めなり」と記載されているが、これは、痘瘡であって、麻疹でないと見るのが至当であろう。麻疹の流行として、最も信頼があるのは、九九八年と考える。中国で最も古い麻疹の記載は「肘後方」である。

ヂフテリア：中国ではヂフテリアの流行に関する明らかな史実は一七八五年である。日本でヂフテリアの名称を用いるのは、明治八年頃以後のことで最初の報告は一八七二年に見られる。両国間の記載には八七カ年の差がある。

コレラ：両国伝染病の流行史に於いて、卒然と猖獗を極め、其の惨害と酷烈さは、コレラに比するものはない。中国に於いては古くはこの病と霍乱とを混同していた。日本には最も多く使われたのはコレラの称呼である、中国と日本最初の流行年代は前者は一八二一年、後者は一八二二年で、大体世界にコレラ大流行の年代と一致する。

ペスト：一七九二年から中国に流行する、日本の始まりは一八九〇年である。一八九九年新たに法定伝染病の一種として指定された。

疫病の流行には、その時代の自然環境や社会環境が大きくかかわっているにちがいない。特に以下の原因と関係が密接である。

一、自然災害：自然災害は疫病が蔓延する誘因になる。古書には飢疫とか旱疫と書かれているが、洪水・旱魃・蝗災・地震・飢饉など災害後の疫病は中国の清代まで一二九件を数える。日本では明治まで一〇九件がみられる。これは、疫病流行した頻度の約二〇％を占める。

二、交通：古代の交通状況は限局されていたので、疫病の流行範囲はある程度に限られている。しかし、古代の疫病の防疫措置は非常に不備なものであるために、交通が改善されるに伴ってその流行地域も広くなっていった。例えば、一八二一から一八二二年にかけてのコレラ大流行は、世界流行中で起こったもので、中国から日本に広がった流行病であった。

三、地理環境：中国の南地方は北の地方より疫病流行の記載が多い。南は北に比べて気候の湿潤、肥沃した土地や人口集中の地区である。疫病にとって比較的有利な環境である。そのため、往々疫病流行地となる。

四、社会政治：社会状勢の不安定、戦争が頻繁にある時期には、疫病の流行も甚だしい。例えば中国後漢桓、霊、献三帝七〇年間に疫病の記載は一七回に達する。文献記載によると、戦争と関係がある疫病の数が少なくない。

中国と日本の疫病史を研究してみた結果、古い時代では、「疫」と記すだけで、病名が判明しないことが多い。この事実を記した歴史家にとって疫がどんな病気であるのかは関心がない。なぜならどんな疫病に対しても人間は無力であり、疫病は人智を越えた事象であったからである。しかし、いささかでも医学の知識が増え、治療や防疫の対策が取られるようになると、はじめて疫病の違いを重視するようになる。疫病の歴史は社会の歴史であり、文化の歴史である。中日の疫病の歴史を比較研究することで、人類と疫病の関係のみならず、中日の疫病に対する見方の違い、流行に対する処置の違いなどがわかり、それから中日の文化の違いを知ることができる。

本稿を記すにあたり、酒井シヅ教授にご指導いただいたことを深謝します。

（順天堂大学医史学研究室・白求恩医科大学）